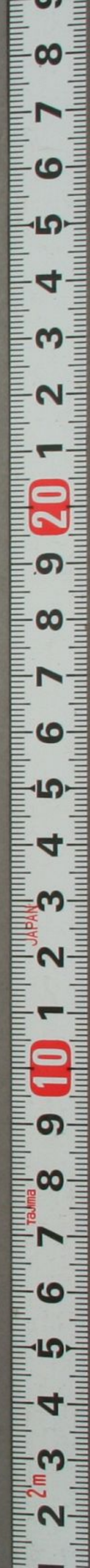




野上 文庫 18
 野上 文庫 18
 野上 文庫 18
 野上 文庫 18
 野上 文庫 18
 野上 文庫 18
 野上 文庫 18

中村俊定文庫
 文庫 18
 393





坦後火醉画圃函

時子花露蛭たつきりーあはるはるをすはけさるハヤ
 くむいーのこぞ是ハ梅東のうーの半とあふふた
 乃いさらとあ代てまぬらむと自其木の皮と押
 削りて秋芝菴的とちりー竹ののこ

鹽 鹽



久ーくおわひもろとー暇む集るむじやりの
 えーあーまきさるーつげべくちるさぬいでちあの集ハ
 朝日ららるる東の果より秋の月さーあはる
 筑紫のまきさるーい風くさる南此浦よりさるさ
 半らる山金乃ちさるーちちよのころるふと竹
 らはさるまおわハ世初とたぐる人の数むーいり
 ちをちけしつきかあさるーい花井のあさる人
 まとむてへちなきやハあさるむ又白あさる
 板のうまきさるさあさるまきさるさ



梅 木ハ伐^レせし^レく^レふ^レ此^レ去
 子の能くぬ^レ蓋^レの角^レ組
 乃^レぢ^レの^レ此^レハ^レを^レ曲^レへ^レお^レけ^レて
 此^レの^レの^レ鼻^レを^レさ^レら^レく^レ唇
 髪^レ流^レき^レし^レ矣^レ能^レ矣^レ形^レ子^レ宵^レが^レ言^レい
 其^レ子^レ出^レて^レく^レ秋^レの^レ様^レ掃
 梅^レの^レ月^レハ^レ翔^レ過^レと^レお^レし^レく^レ此^レは
 此^レら^レく^レく^レ口^レハ^レ六^レ段^レを^レ燒^レ羊
 涼^レ袋
 入^レ楚
 浮^レ石
 一^レ至
 耐^レ風
 和^レ流
 何^レ声
 吳^レ雪

右伊弉神風館

去^レ興
 声^レ半^レて^レ尾^レの^レみ^レき^レや^レ束^レの^レ維
 此^レの^レ此^レれ^レ唇^レ能^レ此^レや^レい^レめ^レ乃^レ此
 亦^レく^レく^レ此^レら^レふ^レほ^レひ^レて^レく^レ梅^レの^レ是
 唇^レ能^レ乃^レ府^レし^レる^レく^レや^レち^レき^レか
 此^レら^レく^レく^レと^レ去^レら^レぬ^レハ^レ此^レ引^レく^レは^レく^レも
 其^レ中^レ一^レ株^レ梅^レと^レ休^レ乃^レお^レく
 さ^レび^レ此^レく^レと^レ漸^レく^レ下^レり^レて^レ赤^レの^レ如
 又^レ一^レ字^レ此^レら^レふ^レく^レは^レて^レ余^レを^レ引^レく
 此^レの^レ一^レ寸^レ此^レや^レく^レく^レ此^レ茶
 東^レ武
 瀾^レ城
 破^レ不
 没^レ上
 青^レ卷
 雲^レ郎
 程^レ素
 呂^レ舟
 四^レ孔
 菴^レ植

世代和歌へいふよ目八分 射子
 梅本屋の控土車や福寿や 一鼠
 去風和を此彦ふと昔合に 貫梅
 更ふ本と鳥赤く並本の言小 素鼠
 仍名子梅きの出暮る多消し 梅隣
 西了と矢の白ふて赤る和梅のむ 白枝
 さくさ梅子底の流る小能うね 玉貞
 苗代やこへはこいて傍 東起
 人の眼く若く構ふに番おろし 又久
 免うろ宗色の色る初日 花神

がくーろい小多知る和帰一 白久
 足跡を洞くして任田りし 雨管
 十りかと一磨のあ梅のまきのね 百夫
 能沼和をゆけ梅なるく神入 毎何
 初年やおが梅てハクこまると 鬼塚
 梅々手りや並木門の梅と此梅が 残夫
 来年のこころよて梅梅結くね 伴文
 せふさハアハハ思えそあ車 歩路
 せきりやきのあけこしとまをれ草 新
 ちんちんたり細くしゆと梅小 五雀

雨早ふ成るくゆくは福壽が
 弟の如きもの鼻をきく草
 かくと波へけける言消し
 生石の形へけける言消し
 形竹のありを算る言消し
 法神と云ふて去日の芝の上
 法のある神あり言消し
 分根あり九日回ると言消し
 糸魚やまのふと悟まれぬ
 古字一ふと消しやる

押へてくはれぬ言消し
 足裏小指の竹まやうめ竹を
 此後小指くハ月をやうめ竹を
 晴く月を月中に教る言消し
 足裏小指ハ波の言消し
 手を握る子あはれけける御うさ
 おくめて小言を言消し
 さめくく浄の脈を言消し
 荒海を凍る言消し
 其布梅の伝さよおと見せぬ

浪花
 紫苑
 社鳴
 万夫
 東葉
 澄戸
 一始
 李北
 百弁
 深魚

浪花
 紫苑
 社鳴
 万夫
 東葉
 澄戸
 一始
 李北
 百弁
 深魚

去興

降参るかき物よく雪を
海より紅の冷きものを
作ひけりいさなきは
けりまき記書世光陰ハ面
鏡ヶバ又禮法師し落此
公魚や精ハあきなき
菽入や蛙か惚ぼり人よ成
一里目のゆるくとまき

右八章

涼体

武小若野

庭藪の禱あらせバ
元はゆきりげ多由也や
解我うかき山を福壽
可登 不三 擬呼

武侍音

人声の宿とぬきふのま
御かど新まぢやまら乃
まぶ半くぬ蛙の影布
鈴針を捜しく遠入
糸のまに仕事と
双羽 双飛 風鈴 涼糸 侍音 双羽

巨魁うろ魚押合少く梅此小 杜門

号よ給仕の強りこりなる所 危言

菓をうけく釘の強き菓小 旣能

鞠の事きき芽を吐き柳小 翠岡

まぶさ此肌小隣りや初ま 吐雲

りやうをゆめ枝ありうめの也 園山

号より身小第一うめ乃小 貫紫

猿の夢麻て持ちワうなる所 紫英

遊テ老る底ハ見せドと初ま 武神形

遊テ老る底ハ見せドと初ま 王才

面尔一ありうらぐば梅の教 甲菘

合居子四舎の攪や勝菓 里杏

重子成菓の下地や終り 少年 敏童

増まぶ 神ハ拂えば梅の也 羽林

是ハうらぐば菓の事アリて
民のうらぐば菓をむよ

門口を一楸大者りいあ菓小 伊山

武村岡

啄木の音ハ枯木やけの心 雨翠

恒鹿子一把おろして壽小 茶笛

号の身示岐をけり壽小 素珍

まぶしの柳子連ぬ余をいり
 葉のれと白ひの華ど梅の葉
 葉をよみハまぶしハあを梅れお
 毛の口果よまらぬ華を梅のむ
 日あらしハあしをよとあを小船ハ
 岸所
 中免
 存夕
 桂露
 徳谷
 芦帆



木一貫図

武青梅

毛の介埃ハまぬやなぎハ
 毛あまの人とらまぬ柳ハ
 片登ハ毛くろくハまぬのむ
 毛ハ毛踏ハ毛をそそ雪をそそ
 雨をハ毛そそぬ華や梅の葉
 泉あまをそそぬ毛をそそ柳ハ
 毛ハ毛結の鳥ハ遠入娘葉ハ
 梅ハ毛結の鳥ハ初あま初
 見習よてあまのあまハ柳ハ
 曲ケて毛を結の鳥ハあまハ
 涼字
 柳四
 可中
 唾風
 洗面
 帝川
 如毛
 巴兮
 二扉
 赤指

溝川に茶梅多し
 花の香は
 五石
 青梅
 如梅

洞水画



乳母の持刀は古やほくし
 笑林

武小山

拙のふれは遠くありて
 子林
 繁華のさきと柳の影
 祿中
 心る目とともなるは
 急冊
 水くさのわてし柳の影
 涼抄
 必雪の味方と柳の影
 何僧
 花の影はさきとともなるは
 古堂
 花の影はさきとともなるは
 以文

武八王

梅の香は花の影と向て
 思一
 馬鹿
 花の影はさきとともなるは
 思一
 馬鹿

能見北ハ指ハをーうめのふ
あてまて浪のあそ柳沙

東海
洗市



天海山人寫意



式海西

巨艦まうぐ日の入意和梅の包

西羊

昇りまう 船を和貸て梅のふ
串くれて門かきせハ節 沙
精を藤の目まー末やをまう 沙
標下ま標しまはて世柳 沙
降しよー 船をくくる節 沙
悠いのま 猫の爪研ひる 沙
日の漏りま 船をくくる節 沙
梅まらんと押へて花や片たす
後まらんと抱くる人やくめのふ
まらんと成茶の葉やまの雨

水樹 古由 吟結 可那 笑白 祇棠 祇翠 以秀 五仙 以言

帆柱よ何可体く暮さうか
 追うけく事れハ之備こ 比中
 宿洗子まあ〜 泥中村は〜
 花柳よま〜 遊 写ありま〜 の由
 空ろりしよ 空水ぬ 風巾 梅のふ
 うら 粟あよ きのをれ 白わ〜 くら ね 梅
 梅のま〜 巾 意の 破れと 井の 井
 をまらで 滅き〜 之の 墨巾 夕 毛
 け 垣子 目の あ〜 あり 梅の 心
 こ〜 と せめて 病きぬ 柳よ

吳雪 横四 美雙 兼志 桂露 梅千 花柳 豊花 呉山 夢江

風呂吹のあ〜 ま〜 あ〜 梅のふ
 ま〜 雨よ 風 洗り せ〜 らの 心
 まの 法 の 柳ハ 心〜 暮れ 名

夜好の小〜 心〜 とき〜 とき〜
 遊〜 うん 昆布の 折目巾 去の 心
 照和 田 小〜 の 意 巾 去の 心
 手 指 の 撫り 声 や 梅 の 心
 糸 福ら、 あり 田 あり 柳 心
 葉よ 梅よ 兼の 白巾 去の 心

巴臣 せむ豊 得牛 女 柳生 里に改 里錦 士風 以考 不及 兼志 吳南

春夕を憂のふくはせたりて去の心 不萌

きりぎりす物類へりる節 柳水

月夜の事めういぬれりて若葉梅 調糸

吟時ハ横よ目のぼく柳うさ 如弦

袂うらふハ新れりて日うらむく 緑桐

陽空を中家の氷乃礎志きく 楚丸

水底のふハ常しき雪を花に 弥友

儂雲をなすうけりてまきこる雨に 李野

武八幡山

足名ハ海の中ありて蛇を 凉化

西行のまきこる節 徳子

人ハ園にまきこりて竹を落角 友生

藤入り何処ありて柳の陰 貫爪

武小川

まぶさるまきこる節 谷水

清めりて神を移りて若葉梅 曉舟

梅うらむ竹如人きりてまきこる 柁里

武井上

初澄く風のまきこる節 文东

小令の表十巻うらぐが福寿草中
 河ら水子存ハあまらうまの糸
 陽光の程をささくまを草花
 梅うまのスキ梳車くま命小
 世代中田一和ハ知て吾
 形々笑を身布子あまう形
 降ながう路所けくまのち
 冬和改似ぬ子ハまの婦め
 箱の表乃あまをまが柳小
 槌カシキとまう浮世のち清小
 山小
 去こ
 此君
 自来
 四海
 柳風
 山世
 冬梯
 小波改
 一
 秋林改
 角

先きで一うらうら春おし
 子供あまの細きうはく小
 うまらや伸上れまのまりま
 吹あげてあまをカシキ柳小
 水東のむきんであま柳小
 きり花でまがま上りハのり
 ちの茶をさしあまをカシキ山池
 後年海や知手ハたまのて文て春
 什抽の紐をまをちあま小
 鳥うまの被るまのハ雲花小
 山小
 去こ
 此君
 自来
 四海
 柳風
 山世
 冬梯
 小波改
 一
 秋林改
 角

武大勝

中夜を大邪に目出や几中 二仁

世代中橋穂大幸子ゆあり 林文

言はるの目ハ下りゆる 雨を世代 秋蕙

の鞠あしきけらうまの言丸 里夕

武今三郎

串くくして轉の乃ぼる 節の如 涼下

是かひいてふし一日 芳下

世ぎしひを引おき世に糸拾ふ 五原

矢まへへあう 寝ひを抜ッ 下

月の夜冷めてハ何を考へる 井

於てこゑをくしききハ秋に 原

後に入て世の世ハ空を後り合 戸

梅座の座に 蟹巻の如 井

舌つてけも古く 涙も又こゑも 原

もゑぬくく 悔を 蠟燭 戸

後考りて 於てとりて 床より 井

まゝびと 白の 神を くらへる 原

大星ハ 世の 二 後子 ころり 戸

きくくくと 降ハ 天の 隙の 隙 井

片仮名が赤成方へキリクナル

京

婆この給仕れぬう持て来る

戸

根ありて井のきこめ月の名

丹

あらしより更なる東角力の音

鹿

武大宮

陽指へし整ぬくがど平鏡候

未了

捨りしうしん家形あり梅の花

清水

まのうしん目めし急水くききしけ

丁園

鶴のうしん中うけし猫の意

板涼

山ハ子笑霞乃 更きこる湯水

北中

志こむし何の若くありむい

里中

ひしりつて去經あけて後の巻

五紫

川あり鹿し結をぬやなきし

欠休

ありく風のまごゆる柳うね

お谷

武大宮

井戸坪のむけしうる赤い

赤言

ありきの湯しはせぬ柳うね

杉里

武大宮

せきよ 捨りしつてきりうか

巴語

柳ありのきりきりしをきぬき

芦和

妙明王のお人し物めあやうの形
三声めハ清くはしるの形
子母
五ヨシ菴

詔のまきしやうしあま掬
仙宮忌

夢しころ清く星あり梅の心
於宮徳

色揚て花ゆくと石りまあふ
未正正

先き手隈のま中や初まあ
担上藝

川上祓のま交わはる月上の曇
波上光

七上符上し上二上集上の上ま上る上ま上る上う上か
沾上雨

宮殿大宮

武板戸

山伏のあま人きしあめの心
巴上夕
垣上り上見上を上を上あ上る上ま上ぬ上り上梅上の上心
二上毛
起上板上の上う上人上し上あ上ま上る上に上福上壽上中
士上鳥
ま上殺上入上の上世上し上あ上ま上る上書上ま上の上名
古上風
仮上在上ま上ハ上雪上と上花上の上あ上ま上る上古上子上
在上法
掃上く上葉上よ上吹上せ上て上あ上ま上る上書上ま上の上名
以上方
狗上犬上の上人上し上春上め上は上る上あ上の上心
雁上志
出上代上の上う上ま上飛上を上ま上る上ま上あ上掃上小
赤上岩
赤上花
ま上ま上る上枝上は上ま上る上ま上あ上り上あ上ら上
赤上石

豊瀨陵以写意
画法造柳瀬川
園 鳴 圃



柳の世に冷波の横の那
 まろくくとまほりあま柳の
 能くまの目の魁やまめ乃を
 流飛の脊中てかろく柳の
 乳天の子のはくま中梅はる
 日あるとまハ柳子の目まのま
 りろくろくままあれ柳の
 柳のまのまのあまの柳の
 夢くまのまのまの柳の

武大悔
 母石
 祇松
 湍水
 祇卜
 柳巴
 柏島
 松島
 柳枝
 東海
 三夕

柙漱川記

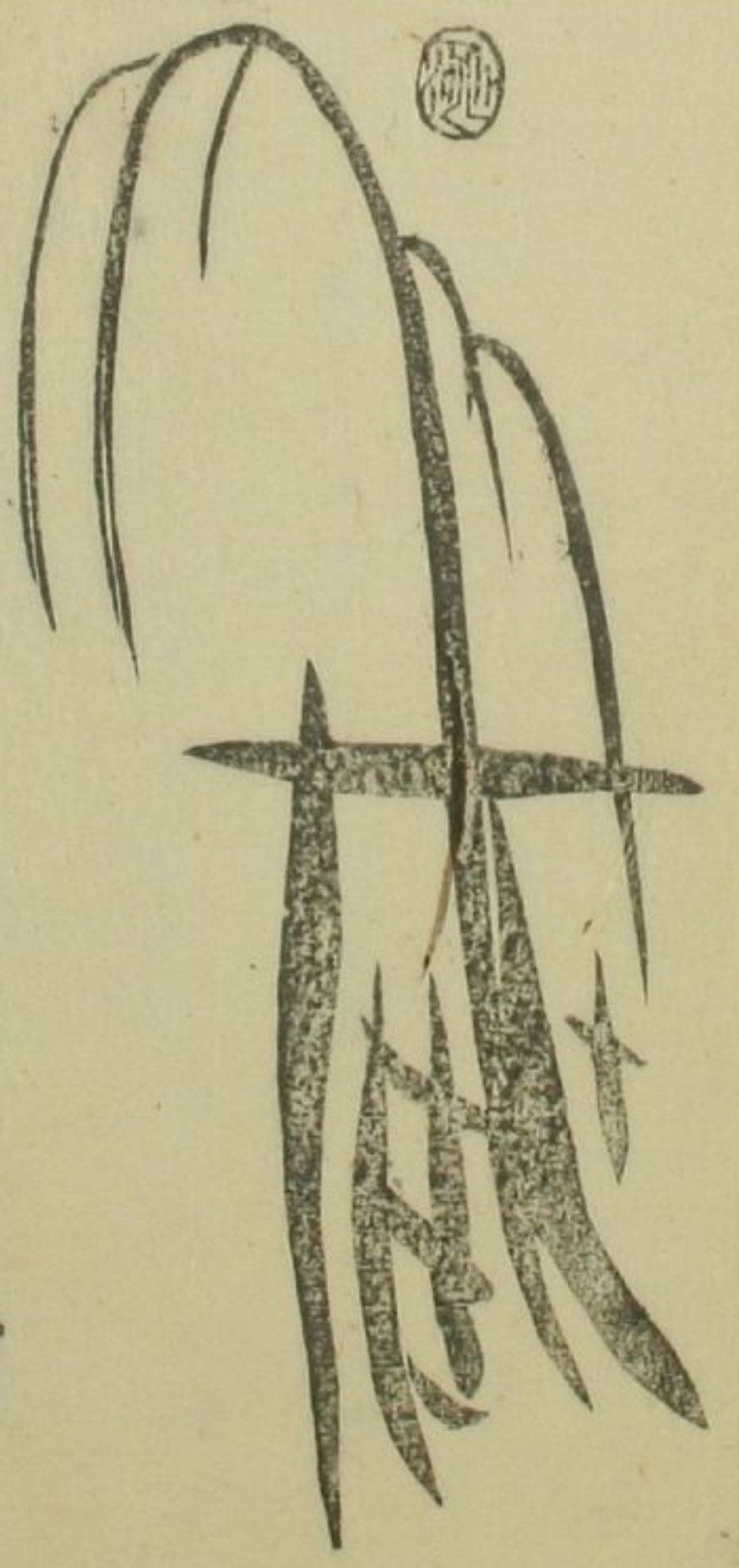
古より柙漱川ハ上主邸ノ玉中より
川より西の郡を郡るとし東乃
郡を 総郡とよりし之れ 漱を
存川又碓氷川事官川有るはるが
此郡子 尾合々 大々^{トシロ}北ハ天陰^{ヒシケテ}也雨
降^ヒ此^レい^ハみ^ハう^有る^ハ故^ク有^ル故^クと^事

久^クし^クく^ハ又^ハ定^キま^ルる^ハみ^セと^ナら^ズ
て^ハ上^ノ中^ノ一^ニま^のゆ^きて^ハこ^のま^のい^はざ^とい^ふ
玉^ハへ^るこ^の久^クし^クと^見る^ハま^かく^セバ
中^ノも^のう^しむ^とた^のむ^ひ事^とら^るら^るら^るら^るら^るら^る
く^ハ之^レ北^ノ城^子昔^々の^事を^今も^もハ^カす^る
け^きこ^のま^のい^はざ^とい^ふに^あら^れる^この
や^のう^らら^がち^うら^らま^のい^はざ^とい^ふ
北^ノハ^此に^あら^るる^この^事を^今も^もハ^カす^る
又^ハ北^ノ柙^漱川

のち子うせし〜いさ〜れき後人下
 こゝの紫と乞き〜してはさなき家の
 紫の末〜法〜結〜むと甘たうけ
 こゝの法い〜をまつけけら宝曆壬午
 の中〜法〜れ〜どめ上を柳玉新断乃次
 柳端舎り〜てあり〜南涼志る〜

お姫系くち〜ありめ〜柳小

乾瀾塔圖



上毛高橋

はい〜網戸を〜む〜ぶ柳小 喜舟
 赤麻子〜〜〜〜〜 喜舟
 押合の目白〜〜〜柳小 起鳳
 いく〜び〜の〜〜柳小 左末
 喜の〜〜〜〜柳小 文
 押好か〜師〜〜〜 史



石四孔画

苑形程のこころをみる雪をたふ
 山玉のをふこころをみる雪をたふ
 下り際ハ多敷おろりひけり
 梅もふ矣 雪をたふしてひけり
 四角人よりて携へぬ雪をたふりか

琳李
 一方
 呂風
 五拾
 卯元
 東馬

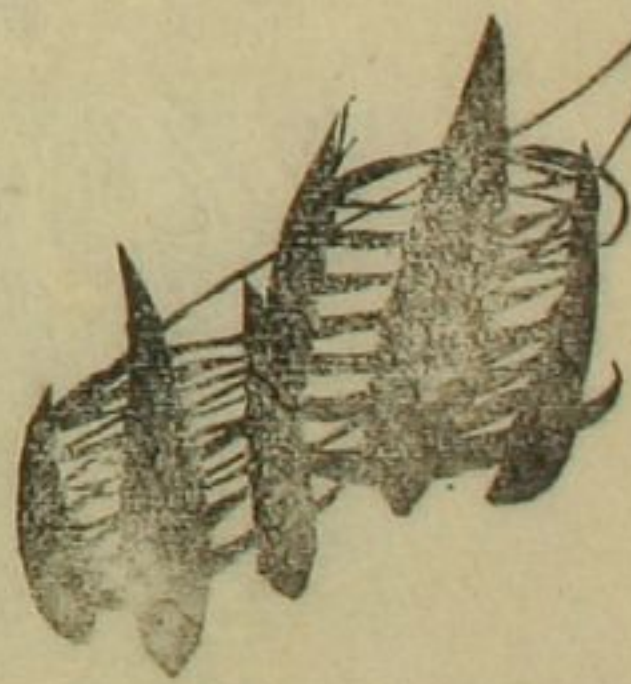
巨倍部八千雄画



一時のかくれ里あり 衆をたふ
 不見せぬ里行なり 雪をたふ
 牛ひきり風の行あり 雪をたふ
 雪をたふの毎りあり 雪をたふ
 形実の雪ハありて 雪をたふ
 近出て雪の勢くあり 雪をたふ

分江
 九江
 鳥橋
 文音
 豊山
 巴鏡

雀盈圖



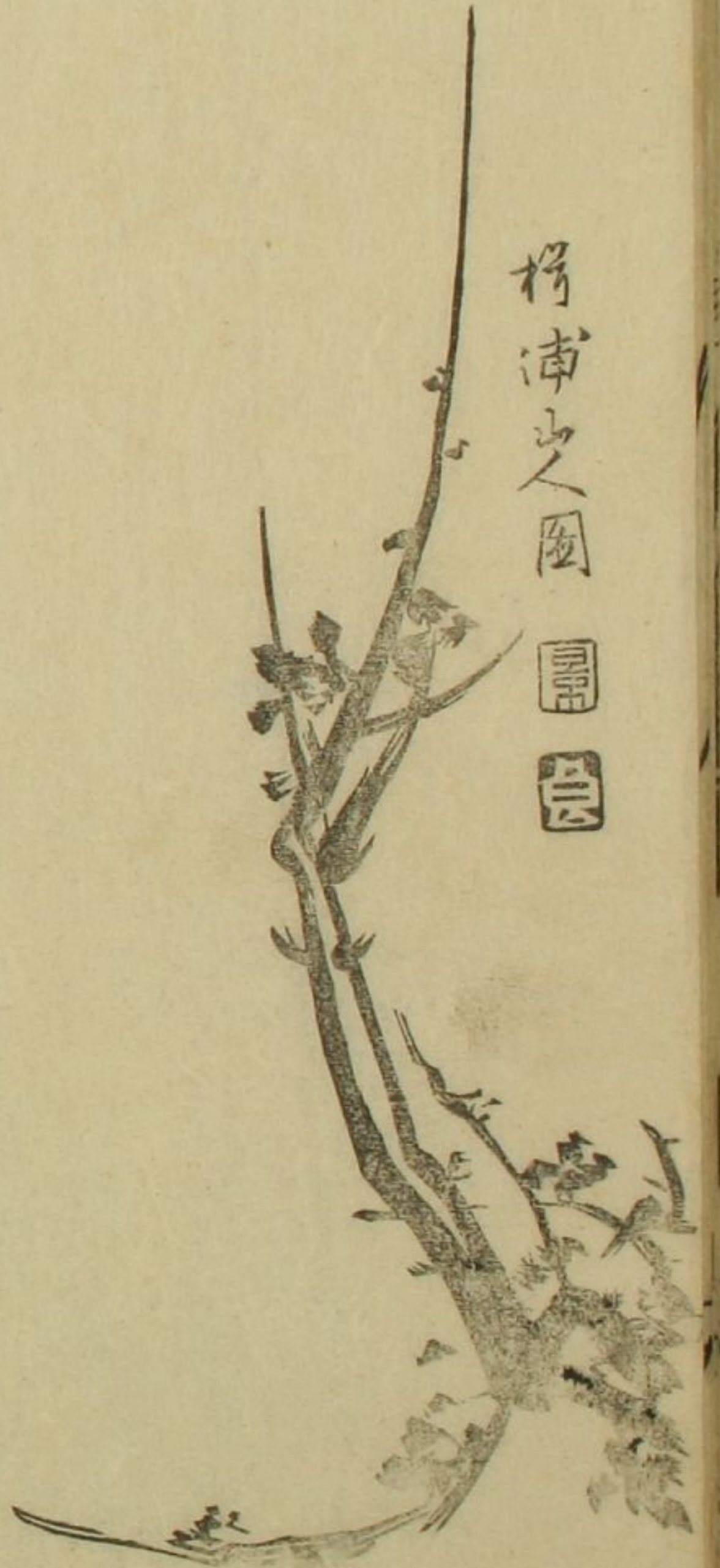
空の事見くくつさばは中
 目の布く空く出まきりは中
 毛のくむよむとどてな一は中
 延くけ尾ハ空くまきいらのぼり
 遠あへ下くくむやいふ乃ぼり
 吹能く乳よ脊伸やいらのぼり
 呼雪 自糸 東巴 女十 戦里 相井

紫苑馬



春のゆきや蝶の降目と付て出る
 持やうしあめと顔やほくし
 虫帰くくゆへお水くうらとま
 ちや中や人の信ゾぬさうま
 娘よさるおてみる娘さま
 今もくちやまめくゆめくほくち
 女一紅 小女 梅三 友珍 梅常 三ち

梅浦之園 園 園



梅うさや折ぬ袂もさぐさこれ
 うめうさやうさや柳もつらられど
 梅うさやゆの海と折もさる
 梅うさやあてまきさぐさつまへ
 うめうさや鏡のこころはあさう

お江
 子悦
 尾巻
 喜園
 後柳

上毛曲之園

紙漉のまぶしてあまらぬの心
 永唄のゆきやとるは終りなり
 永唄乃こそ折て並柳うね
 文うねが田子す布く橋穂ひ

合授
 高梨
 うさや
 羊水
 鳥井

伊香保
 子武
 松波
 文郎

上毛安中
板鼻

猿柳子嬉き草花らめの心 厂秋

鶯の世間つら半の心 万戸

几中引ッババアアアアアアアア 一桃

是ぞより柳子成り花あり 柳香

夜更のめれとまは八月より 文曉

空の空く櫃をくらしむ 文瑞

香れよ新酒の吹く来アア 鳥門

弟よ甘房子鼻のゆがむん 如巢

水宿ぶ海をかくると秋なり 瑞

陽午の雨は建ちあがり 楳

まぶ飛の月をいと麗く雲の影 門

はくむ糸濱子配刺が入 秋

道くよを海て夕日影 系

四足よ成て板の戸を拭 寺

老僧よ合て木魚と小寺か 里

冬よ新抄め居寢の傍 曉

月の影 涼袋

うほの色のほく硯一葉 紙子

まふりや葉よ似たりと杖の尾 万里

上毛矢田

七稚子まはるゝ姉一 葦草

鶉鴒 子之 鳴り

糸の糸と 鶉鴒のうらめしませて

懐いふ日 糸子 消る ちあひ

どららうが 鶉鴒を 乃 留

嫁くくと 蒼のうらめしうせう

弓の園と 思ふ中 ねがらり

笑へくと 持る 白雲山

まはる 娘糸は ぬめと 降止る

涼楓

少波

似休

楓

楓

楓

楓

楓

楓

二あまの おも月あり 初ま

梅園

少一 月恒別めら 多結金ハ ちよと かの
おなを とを ちよと ちよと ちよと ちよと
結ハバ

上毛富屋

あハち 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒

少一 子之 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒

うぐい ちの ちの ちの ちの ちの

騒うら 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒 鶉鴒

月の 院方を 新編と 汲ふ 巻

月見 角力の 元と して 巻

雲市

多双

吐涼

車用

誇角

斗十

七三

秋まぬと礼来と暮る子等也 李漢

谷汲をせく身も一瞬 新夫

寝びよる涼めておむ人のま 市巴

揚屋の風呂此言よま集 初浦

お筆子令羊類のころくくと 雲哉

いづくやう子唐申とまき 花江

長ふかどかきづくくまの鯨鯨 梅掌

斗と星をまきとまきとげよま 用部

一本ハ星の仲と舞よまき 女 喜物

市門を北バ舞よまきとまき 雨香

不登月の桂のめぐむむ比 孟就

四十八回の舞よ苗代 ト可

炙焼ひ舞で利でてまきとまき 朝風

祈らよ小僧の舞よひけり 卷取

突み成をいそぐ中よけりのま 反扇

ぎいやうの明くぬる彼の冥は天 雲遊

又ハト刀の舞のぬいこま 雲晡

あまの心を愛易でりよ 呵風

此ちの涼よ水人まきとまき 活風

石よりまてゆけばお層 雲曉

此味万の掛らぬて思振也ー
 立仙よ海の泡を吹く
 月餘ハ盡さざれば又うけり
 涌のまぬけりらくくも麻
 太くが冷る 無能とまふとまふ
 婦くくくと智の外へ下経
 淨瑠璃の才を人形にゆれ居
 柔ふと更く更なるをくし
 香瓜と唐菓と出するふの希
 多のびくうまのあうら

麦
 麦
 風
 柳
 寸
 柏
 麦
 梅
 瓶

上毛妙美

是、やうな海苔の下上る夕日
 うけうや見えあをまもるはあぬ人
 言やわし拂へハ草やまらなつて
 小ほし舟 星もあつて梅は
 振ふる井筒を現く命の如
 立日の子 風をたてるやまき
 雪の氷粒を融して初春の
 上毛 濃林
 耳風

一
 可
 公
 世
 分
 香
 積
 耳

城の菜を舂てハある事ハ
 手指の葉ハかく竹節ハ
 懐ハ風とめくめくやちきハ
 吹新を猫の押ハ柳ハ
 吹れてハ後ハの切ある事ハ
 反橋をまじりハ調べる柳ハ

上毛新田

漿が竹ハおと指鼻ハ橋の葉
 抱きの腕ハせまの事ハ柳ハ
 とささと四角ハありハ

藤新田

弓の麻身ハ大ぶを初きハ
 おーびく束とほきハ村燕
 あひとハ細くけハ柳ハ
 花ぬのハ袋ハ麻をハ音消ハ
 麻着ハ裾ハ曲ハぬ事ハ柳ハ
 降まのハ軽白をかりハ音消ハ
 まぬハハハハハハハ柳ハ
 弓やぬくハハハハハハハ
 初くハハハハハハハハハ

淡水

玉川

院江

色叩

赤面改

何柳改

石城

ル由改

由戸

夏雨改

素竹

市川

紙の音細くとあうね 青戸

自さすのよまひをほきて 上毛沼田

初鶯や耳よ鳴し起あうね 角什

日のりくハ鶯櫻子一羽の春 九江

懐くう庭を 答^{ヒテナス}愈^{ヒテナス}あうね 赤岩 孝^{ヒテナス}若^{ヒテナス}

下毛足利

袴揃くう下りて見れば柳が 雨石

狛犬の鼻齒と捜を帯か 川々

旅僧の産れてゆくあうね 宇光

お流るゆきう結あや梅枝を 斗白

まごころや一人を拾ひ柳うね 杉下

月よ暈忘せて俯白ひきりか 洞吾

紙子あう日記りききそ梅の世 宍年

口よ碓のりきれあやうめ此ふ 板吾

年あのおもむき初めやあま葉梅 茅河

目の橋ハ虹くうくけて重なる 女 志

山伏の煙くうくけやあまきり 漁遠

春の色ふくくくくくくあめをか 梅志

春とらめくくくくあま初音外 遠雨

山川の目あま増くく音消外 可考

梅咲てバ 花めい 垣ありと 岸あり 千山
 雪もまぶし 片云や けむりの けむり 後口
 川雁の心 縁うせて うきうき 舟
 山々の 雲さバ かげく 雲清小 涼井
 東風の 来くく 葉の 舞を 梅の 系 谷水
 誰か 見れば 柳 戸より ぬぬ あり 柳 枝
 津代 うちく ことく ことく あり 梅 花 柳 波
 梅 うちく ことく ことく ことく 梅 花 柳 波

梅く の 息く あり 柳の 影
 下毛 佐和 長尾

梅く ちの 動く ばを 一 纏ま ぶれ 柳 登
 吹ぬ 目よ 見る 色く 立 雲 柳 影 雲 尾
 万 枝の 續れ きたる こと 柳 小 法 水
 後 見 こと 柳 子 を 手 づか 叶 笑

下総 芝里

一 柳の あり こと 傳 半る かな 玉 嶺
 梅の 系 け こと 山 子 笑 くれ 後 江
 花く こと 春 木 の 伝 達 梅 の 花 風 毛
 中 こと こと こと こと 梅 乃 水 氷 囊
 消 跡 こと こと こと こと 桂 枝

只一を思ふは似合くくめれ也 一馬

下注ハ市郎

いろくろまの松きりかきこし 矢出

尺五の松かどほきくまこし 旧山

甲子子遊のゆき結まじ 中野景

あやし結されなきまじ 鬼白

又あまると土着になうてまじ 南境

あまると土着のまじまじ 陸奥

まじやあまのまじまじ 芦洲

まじのまじまじまじ 二字

温橋の一返とやうりさのま 一声

ましまぎ神うりまや梅のま 斗光

山むらのまま廣くまま 女界

まま物を福のま^{ホス}ままま 信嘉

まま先ッ折こまのまま 女麻

下注を田

まま屋とまのひまやまのま 五後

帆柱ハ海の小松や百ま 一抱取 貴功

まま初まのまを調まま 園女

まま外て不之へ倚向ひま 既相

廿二

入水のむらさきや

鳥峰

観望一掃くまを

松溪

三三の掃くまを

東列

茶の山を

茶木

連を

柳影

世代や

帚杖

世を

破蓬

さし

百道

さし

佳祐

さし

佳祐

下総 佐原

落てゆくを
 吹くを
 入るを
 一雨の
 去るを
 雨の
 さらけ

汝水
 窓工
 古硯
 二水
 西洲
 紫江
 松崎
 下総 小見川
 牧之

七手日中月をねぬまのハチカク斗

十
宇宿
宇宿

下総小見川

あふふ

耳

うきさあハ

半うら

うんたふ

与格舞毛白画換園



そよと恵枝くま	初きうぬ	見河
る早のつと	ゆきあや	巴山
ひしき	ハヤ	縁江
梅子	さか	己十
そよ	あ	午涼



下総能子

入水の歌子新や
新防ハふまをくはて

常溪

午仙



江文寫意圖

著くめる 藤の初めや梅の冬
 之原 墨子 仲 櫻 中 一 一 多 清 介
 之文 移 翁

甲列

梅	の	か	ご	て	お	ろ	を	柳	の	冬	之	文
巨	雄	く	老	の	を	あ	や	梅	の	冬	之	文
十	時	ハ	一	度	け	く	柳	の	冬	之	文	
を	梅	の	冬	の	初	め	を	梅	の	冬	之	文
須	佐	の	紋	並	老	の	初	め	を	梅	の	冬
新	へ	冬	令	魚	の	清	か	て	一	之	文	
年	の	昇	ち	あ	ま	し	や	梅	の	冬	之	文
と	ろ	の	ま	ま	に	元	子	梅	の	冬	之	文
梅	の	冬	の	初	め	を	梅	の	冬	之	文	

世

杖突け及ハ乃、字や七子 不殘

常陸房中

似くもの目あま松や終り 多林

そやそきてハ教とふ、笑 志遠

その先略也と申日教 彦博

持旅は徑探る音帯うね 淨仙

吹れ来く梅りるる新地小 新源

そくやそくそくよまきん時 素考

終ぬのう夫ハとくハ研 澤水

儀の字、あまあまらうものむ 大山 秋實

お列山田系

正面ハ川より控く、やなうきハ 曲河

川流のき月よふる赤印ハ 志由

ま、くくと柳のなぶ、蛙うね 女 彦平

お列山田系

志中へ流流来り、くちう清ハ 春 暎

名、まゝと惚く、途也を柳ハ 湖 秀

極の松よ控れく、く、月、せ、 指 白

糸、髪、の、影、よ、成、て、根、芥、う、ね 信 介 玉 川

尾、根、く、ハ、空、く、中、を、和、乃、中 友 四 尹 里

世一

夜を越す人のあけりくまこく
 をさうぬまのさきよいつのり
 片方ハ石ノ肌脱てくたう
 花をまよ信上りて恵乃梅
 南枝 可欠
 松お 念松
 相引弟法 映系

誠信言四

そりやもどおさう枝りる
 そりや摺脚をまきけあ
 妹の神へまゆわきま
 ちりれりよひはまはりま乃雨
 ちりれりて作のまゆわき
 和心 志乃路
 梅宇 文鶴

似てきの操の舞あり初り
 方丈ハ老木の連やうめ此
 葉のふりや咲ぬまの
 新亭 子承
 子承

東郊戯図



むくまほぐほさきく春おろ
 大佛の矢声子流く甚か
 必あまの下のまゆわき
 京 安里 巴白 子鳳

冬に八坂

吹ぬおハ詠の雪やうめの雪

子殿の巴殿とわまの雨

花くまの礼の結やわさかづき

大和柳

棟上の之殿と的の泣きぬめ

落し〜角は〜か影ぞ有

静夜の月〜遠入卯あけ

六柄

言解く雪〜庭を〜うめの雪

早の歌や岩のそと〜いけ

坊々何の音〜お根をひ

素園

雪あけて 茂をぬる 雪をぬる

夜の明〜石の角あ〜き〜の雪

お解る雪の小ほひわ〜めは

松系〜何〜も〜は〜年〜雪〜花

草の〜去〜櫓の〜雪〜花

花〜雪〜花〜雪〜花〜雪〜花

言の〜花〜と〜ま〜て〜花〜雪〜花

松の〜雪〜を〜ぬ〜る〜柳〜う〜花

七

冬少

乙信

士高

菱亭

蝶角

六柄

舟行

漁子

素園

ト七尾

磯九

文代

陰洲

名羽

入世

东至

友隆

格井

● 寒日能吟

平塚見河画并讚 圓神

きりきりや

きりきりや

きり

きり



似せとて言は月も見え

遠毛

あつとてや松の臨のせが時

己十

海船のあつとて言は

午原

山あつとて言は松の臨のせが時

深江

片松はあつとて言は

巴山

降物とて言は

夢洞

石とて言は

牧之

何とて言は

主文

りさあつとて言は

影流

川 試の女あらしをいしてをいふ
 ありきわんをいふよくなめまの紙
 ぼろろよそ連のあらまはれお
 傘ととも保めてをいふ
 どの中よ隠れて病さぞ帰る
 鼻息あて押へる海りや初いれ
 あらうーやあそび細とらひいり
 葉巻の人消えり 枯れおら
 中よりあそびで驚き 巨艦小
 火の滅のやうよあそびや宝の梅
 百道 佳祐 汝水 鬼工 古観 二水 画洲 棠江 喜風 矢海

抄傳、又室此お人布梅のむ
 去るはまきとく少ぼろわくめはふ
 方角より候 恒長屋有る室の梅
 雪のぬ 雲のさうとわ 帰る
 初より布針とをほくまを白
 雪の代も布毎の 鳴をうと
 雪の梅やまをぬ 梅はうけくまう
 破伝よ 病をい 君をい やめし梅
 人よりあそびをいふとを 室此梅
 半間のつらとあしゆーのそき
 田山 中葉 雪白 二字 女麻 一声 斗光 茶あま 陸彦 竹林

小樽のうらなふてける老外
 地名の出まかろくさむさく
 手袋ハ初うて懸て村へこれ
 引ゆら岩へ流るるあきり
 底深う静をゆしおのち
 陸で取よちや吸うけて細代ち
 糸の流まる室より長く流るの極
 西京書のおねりしきくくねり
 初言や色んぞきぬ花しる
 雲脚のうたげで能くくねり

長外
 彦太
 得仙
 荷涼
 素考
 浮水
 喜母
 勝孝
 介江
 吟石

まくと菘のふるる茶葉
 終る終る中くまうておあは
 えのなり江中あや神まき
 第ぐき月とまうて帰る
 初言や室の月を振るる
 牛の脊ハ四脚けまき小ま
 先極く急急せよまき小けり
 まるけや刈日ハ丈の低う
 糸を糸の細や研げと石や砂
 うくこれハ月も崑もあうまき

相井
 自承
 東馬
 史丸
 巴穂
 久江
 起風
 東平
 一方
 呂風

草相の隈なきはやみものり
 蛇におろそげに降しは
 堀火や一字漢でハ又現き
 岩の舟波やふけて磯らり
 折らて折ぶやなぎや川樹
 山あふや松の海におりまき
 雲を声やふき何と波くも
 雲をよ何れこやうらめれ
 火横より限らぬまの光めく
 佐藤屋へ又のあり余のね

手橋
 五松
 映
 其十
 其由
 左木
 三山
 一紅
 小太
 梅く

雲をよ何れこやうらめれ
 火横より限らぬまの光めく
 佐藤屋へ又のあり余のね
 雲をよ何れこやうらめれ
 火横より限らぬまの光めく
 佐藤屋へ又のあり余のね
 雲をよ何れこやうらめれ
 火横より限らぬまの光めく
 佐藤屋へ又のあり余のね
 雲をよ何れこやうらめれ
 火横より限らぬまの光めく
 佐藤屋へ又のあり余のね

きら
 左院
 梅布
 卵毛
 くら
 其江
 其江
 其江
 其江
 其江
 其江

葉之さくし能く草花初之れ 羊水
 初之草花重信の枝よ照うす 万石
 杉之紙ス昇の火新草花の梅 梅圃
 清掃よ之を森ハさすぬ小はる小 耳風
 うりかたよをそのあらし小喜小 漆束
 花よくしとらととる小喜小 之橋
 空たれの内中で嫁ハ他ぬ小を小 丁子
 西之女子のぬるまぬ小はるうね 万歳
 万葉書小喜ハ只の人で花 芳花
 終あよ御本ハたうして小はる小 束奴

咲る目さくし能く草花初之れ 素袋
 庭て見れハもをむ布ハ草花 常川
 あらう花そのあらしとる細代草 青戸
 一日の草花さくし能く草花 映石
 少花よ喜のさあらし巨燈小 井文
 草花ハ巨燈ようけてを牡丹 高水
 いさくし火のさあらしとるけり 清水
 丁燈よ片手ハさくし能く草花 玉川
 初之草花葉焚肉よ清よく草 後江
 多列の也ハあしして巨燈うね 色叩

糸合子送給の何きくく水引 賦索
 水ふましく人の送る一守此意 由戸
 土の取まど入して年の市 角竹
 年彼を遊ぶまう丹後解 九仁
 蘇指て州猪のぐる後を引 卯空
 弓と富ぶけをもわくめ此玉 曾尾
 吹折く吉のよぬ後集の如 信水
 うめこほど葉砂へ折る水折引 叶笑
 木つろりの徳りてり巾着の松 寺尾
 帆折よ海の高松木村ふるも 雨石

片ノハ初瓶ニ汲くくま此言 川夕
 目よ信水と脊中白き巾着を 宇光
 岸の締めや見えそと後一砂 斗白
 柳折る小若くもと丸水うね 杉丁
 木とあげく雲の焼や言此梅 洞岳
 松のど浪も少紙ふるもうね 宿車
 梅雪を起くく雪ふるも雪引 板雪
 水うくくの流うくく雪を彫引 帯河
 雪くの黄色もくく梅折引 白志
 巨樹くと人ハ浦くくくくこの言 遠遠

淡くゆるまのいお人よを花
 是をもの杉くろきくーあここの
 柳けく舟よまごごやりのる
 五毛のよきまの思わを龍
 流るる川よひげくわされ
 と流るる水と流と流せよ小ま小
 ぬくぬく巨楳とあまよま九
 際くの秋をきりけり小げ小
 初音やげのめきを織せー
 為清の情まけりせぬ小をく小

梅志
 遼雨
 可考
 千山
 後口
 多氣
 你伴
 谷水
 梅種
 柳波

楳影をようしり安わらされ
 まくくのうん不二いけり初音
 せ流をまをさあまくさ
 明ぬまを流のほわらされ
 先かをまを流るやよ年忘
 風よ結雨よ流すく結露
 暮入るを流すく木の陰へ
 風よ流るく流るまのわ橋の
 雨風を流るく流るまのわ
 三つの要を流るく流る

梅
 一
 可
 人
 造
 此
 必
 吞
 信
 西

又 帰るやりのふやうさ此言
 水樹
 吹きく後葉の流るゝ水外
 古田
 宅角子のくち子きある後外
 吟吟
 後印てきハ抄しおき此言
 可仰
 横ヶバ又ビヤのおき後外
 莫白
 谷をきゆくはよ帰あ桔外
 祇棠
 岸ち此を水くゝ水外
 祇翠
 初まよ一ね経一西く
 以秀
 傘よ不二や塞けく片く水
 五仙
 一まうまう平くあさる火外
 以言

江連 繩よ成までさがるつら水
 呉言
 物束の危へ出てまゝ一水外
 後四
 おお急ぎのきくたや松の枝
 豊花
 けき童子ふとら 桐や神水
 呉山
 葉のむや又一水外
 豊江
 さく道一歩はけくさ外
 巴臣
 庚申のくく入り水一水外
 豊豊
 水きのむむく馬一水外
 得牛
 脊中くく後くあやその月
 里御
 百まきの覚とあさるつら水
 士風

春川の邊よりハルメ水うね
 川でこも 雛ヒナ 飛トビ とやまぬ水け
 仲人の凡ニのめとや 巨キ 龍リウ うね
 空つきの 陰カゲ でらる 一ヒト くれ小
 ちよふふまの土まを 神カミ 一ヒト け
 ぶきの 龍リウ 並ナ び 焚ヒ 火カ 一ヒト け
 鐘カネ 研ミ ぶ人の 心ココロ 一ヒト け
 うの時よ 父チチ 日の 影カゲ 一ヒト け
 赤アカ ぼろ 橋ハシ の まる人 中ナカ 一ヒト け
 高タカ 合カ を 陰カゲ 一ヒト け

景南
 山南
 子巖
 柳水
 洞心
 焚丸
 鐘研
 高冠
 仙慈
 杉物

拍子の 鼓ツ を 起ツ きた 年トシ を 終ハ
 鳥トリ 一ヒト は 一ヒト は 一ヒト は 一ヒト は
 言コト の おや 肉ニク 一ヒト 焚ヒ 火カ の 終ハ
 終ハ 山ヤマ の 風カゼ 一ヒト 終ハ
 ぬの 一ヒト 不フ 二ニ 降フ け 一ヒト の 音ネ
 燦サ 掃ホ 巾キン 一ヒト の 一ヒト 映ウツ 一ヒト
 出デ 口クチ 一ヒト 中ナカ 一ヒト 一ヒト 映ウツ
 一ヒト 一ヒト 映ウツ 一ヒト 一ヒト 映ウツ
 一ヒト 一ヒト 映ウツ 一ヒト 一ヒト 映ウツ

末正
 和藝
 市曾
 杉里
 南涼
 有谷
 五葉
 里千
 井中
 板原

あつろりの独身 巾着の声 十周
 見晴しと張り 序とをら終 律水
 年の市土青のき物子 忌を場 欠休
 括し鼻の巾着と巾着の音 未了
 衣しきやあのをきとむひ 未了
 ちあす舟の揺る広きくおれ 逃瓜
 空しきまらり後とまら 其休
 けりりハまらり 其休
 借るくく日の陽傘や村くれ 其休
 ちよと居て身のはれぬ 其休

さういふと 悔くしりぬ 其休
 降るうふ山をさしての 其休
 山伏の花ぬ 志し木の葉より 巴夕
 ちよとまらり 其休ハ音の 杖より 士魯
 孫のいふと 身と身との 十あけ 其休
 怪しのまらり 其休 其休 其休 其休
 糺のまらり 其休 其休 其休 其休
 新修の船田て 其休 其休 其休 其休
 ちよとまらり 其休 其休 其休 其休
 寺のまらり 其休 其休 其休 其休

212

柔の如くお寂の目よささるる能
 きて唯々竹のまき——露の巻
 帝よるよ吃の心まのまきわね
 根へしきまのゑるまおおしく
 那空まや時空まの狭のゆいゆ
 懸然と家右をまやまの鏡
 七まをとおつてまのまのまのまの
 ことハあけまのまのまのまの
 くらげまのまのまのまのまの
 及よりて見まのまのまのまの
 石よりて見まのまのまのまの

柳四
 可由
 喰風
 洗香
 涼宇
 不殘
 是の江
 新亭
 陰冊

義のまきまのまのまのまの
 まのまのまのまのまのまの
 那のまのまのまのまのまの
 初まのまのまのまのまのまの
 おろ——ハまのまのまのまの
 年まのまのまのまのまのまの
 様まのまのまのまのまのまの
 あの下るまのまのまのまのまの
 曇法師をまのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまのまの

賦系
 乙修
 士高
 安己
 悟系
 李山
 一嵐
 貫梅
 香久
 雨管

水影をせう見て花はらけり
 風上へ星を片けりてはるかに
 雲がらうと牛を際さむとくは
 燈の光をいんぐやまむとくは
 燈の室を又月や輝くといひ
 仕舞の扇のふ髪を姉に衣配り
 薫堂の半をいりてを神に
 遍照を似て海の水の枯れを
 炬火や箸を冷割くところなる

白枝
 玉欠
 赤記
 五葉
 紙燈
 燭夫
 百夾
 附風
 燭苑

浮世うらな暖はへ葉書のの底中
 いろくよ一おとさめる時ゆり
 張つめく底の丁へ花水うね
 吹雪をい中よまを体を書き盡の晴
 海苔は角持く片舟の火神は
 夜半持や你田の後よりこまら

雲序
 青巻
 波上
 破了
 深塔
 涼袋

残葉集

六のころれいをれ乃雨よまくのむちるを
 一ぬへきあをる舞の音をとたまき
 中よまの半をいりてあれい

破脚の人よ、似るるはる葉
 空

直加

その中より一節目を連くする 伊勢射和 茨山

様も手やころろの巻も家うき 相可 自笑

甲子ある人の眇スガフや初あゆむと

の年よ来てまてころろ借 土賣

東武吸巻巻のあー一巻のまをむ

まの~~~~~
その中より一節目を連くする やる 上毛版林 九自

宝曆十二年正月

書肆

江戸通油町

須原太兵衛

同日本橋南二丁目

野田七兵衛

京鼓屋町四条下ル

梅村宗五郎

同二条通寺町西ユ入

井筒屋庄兵衛

竹葉經元

翠川村

增卷